

如来蔵思想の信解 (adhimukti) と親鸞思想の信心の展開と実践

田中ケネス (武蔵野大学)

本大会のテーマである「信仰」の一角として「信」は重要な位置を占めると言えるであろう。本発表では、インド如来蔵思想を代表する *Ratnagotravibhāga* (以下、*Ratnagotra*、漢訳は『宝生論』) に現れる *adhimukti* (漢訳は主に、信解、勝解、信) の用例を検討し、約七百年後の親鸞が主張した「信心」との類似性を提示することに務める。

まず、浄土教と如来蔵思想の関係については、*Ratnagotra* において阿弥陀仏へ帰依に関する用例等があることもあって、密接な関係を認める先哲の意見がある。例えば、宇井白寿は、「如来蔵系統は念仏往生と密接な関係にあるのが常例である」と述べ、武邑尚邦は、本願とは「衆生が如来を蔵する」という意味と解釈している。また、平川彰は、「『無量寿経』は、如来蔵思想が他界観念・極楽の思想と結合したところに成立したと考えることができる」、と歴史的な関連まで認めた。しかし、反対意見もあり、柏木弘雄は、如来蔵思想と弥陀信仰の関係は偶然的であり、必然的に結び付けるものではないと考える。

Adhimukti の性質を明らかにする上で、類似語である *śraddhā* (信) と比較することにした結果、*Ratnagotra* における *śraddhā* の十の用例と *adhimukti* の三十一の用例を〈対象〉、〈求道者〉、〈伴う実践〉、〈到達結果〉という四つの項目を持って考察した。*Adhimukti* の用例については、下記のことが言える。

- 〈対象〉の殆どが、人間的なものを対象とした *śraddhā* と異なって、悟りの境地を示す教えが多い。最も多いのは大乘の教え、特に、「如来蔵」や「空」である。仏や如来という人物を対象する用例は一つもない。
- 〈求道者〉は、殆どが菩薩であり、*śraddhā* の用例の場合より高い修道段階にいる。
- 〈伴う実践〉としては、実践が伴う場合が多く見られ、その際、智慧・三昧・慈悲という *śraddhā* の場合より厳しい伝統的な修行項目が挙げられている。
- 〈到達結果〉としては、般若波羅蜜、法身、または、如来蔵である。その他、用例 # 31 と # 34 は *adhimukti* のみで菩提心及び不退転を得るのである。

Śraddhā と *adhimukti* の違いをまとめると、*Śraddhā* の対象となるものは人物であり、*adhimukti* の場合は、高度な教えである。求道者としては、*adhimukti* の場合、*śraddhā* の場合より智慧を有する地位の高い大乘の者であり、殆どが「菩薩」という者たちである。また、*adhimukti* には他の実践が伴い修行項目の一つであり、いずれは悟りを得るとなっている。従って、英訳としては、*śraddhā* は “devotion” でも良いが、*adhimukti* は、 “faith” よりもより洞察力や智慧が伴う “realization” の方が妥当であると言える。

次に興味深い点は、*Ratnagotra* での *adhimukti* を体得する者としては、唯識系の経論で見られるほぼ同じ文章と比べて、自分が仏になることの可能性 (*śaktatva*) が高まったことである。その可能性の向上の根拠の一つとして高崎直道は、仏業 (*buddha-kriyā*) のはたらきを挙げ、さらにその根拠を次の二点に求める。A) 仏と衆生は基本的に同じである。違いは、仏は覚っていて衆生はまだである、という違いに過ぎない。B) もう一つは、衆生が仏の智慧の中に置かれているということである。これは、『華嚴経性起品』等で説かれている「法身が全てに浸透している」という思想に基づく。

以上をまとめると、次のような信仰・悟りへのプロセスが見られる。求道者は *śraddhā* を以って仏または仏語を A) 信じる → B) 仏の業というはたらきを受ける → C) *adhimukti* が生じる (菩提心・不退転が伴い) → D) 修行に励み、→ D) 何れは悟りを体得する。

浄土教における信は、特に西洋では、「仰信」的 (*devotional*) なものとして見られている。しかし、親鸞の信心は、智慧の面が含まれるので、*Ratnagotra* の *adhimukti* と類似する。また、仏の業 (はたらき) によって生じるというところでも共通点が見られる。親鸞の場合、「阿弥陀仏によって廻向された信心」として明確に、より具体的に説いた。

本大会のテーマである信仰の形態の一例として、インド如来蔵思想における *adhimukti* を検討し、それがより智慧と他力的な面を含むものであることを示すことができた。その点では、*śraddhā* と区別して理解されるべきである。従って、明らかになった *adhimukti* の性質は、親鸞の信心の智慧の理解するための糧となるであろう。いずれにせよ、インドと日本という地理的に離れた地域で、このような類似点が見られることは、信仰という今大会のテーマの一つの視点を提供することができたと思われる。